

副所長定例講座

「『歎異抄』思想の解明」第Ⅲ期・第5回（通算第25回）

第四章——浄土の慈悲（5）

加来 雄之

『歎異抄』第四章（加来試訳）

『歎異抄』第四章	加来試訳
<p>四 一</p> <p>①慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。</p> <p>②聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。</p> <p>③しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。</p> <p>④浄土の慈悲といふは、念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。</p> <p>⑤今生に、いかにいとをし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。</p> <p>⑥しかれば念仏まふすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらうべきと</p> <p>⑦云々。</p>	<p>第四章</p> <p>【主題の提示】</p> <p>①慈悲には、〔自力〕聖道〔門の立場から、他力〕浄土〔門の立場へ〕の<u>変わりめ</u>があります。</p> <p>【「聖道の慈悲」について】</p> <p>②聖道〔門〕の慈悲というのは、〔この現世で自力によって〕人を、あわれみ、可愛がり、はぐくみ育てていこうとすることです。</p> <p>③けれども、思いのままに助けとげるということは、きわめて実現が難しいのです。</p> <p>【「浄土の慈悲」について】</p> <p>④浄土〔門〕の慈悲というのは、念仏して、<u>いそぎ</u>仏となって、大いなる慈と大いなる悲の心によって、思うがままに生きとし生けるものを利益することを<u>いうはずな</u>です。</p> <p>【「かわりめあり」について】</p> <p>⑤今の〔迷いの〕生にあっては、どんなにいとおいしいと思ひ、<u>不便だ</u>と思ってみても、<u>自分の意のままに助けることはできないので、このような慈悲は始めも終わりもないのだ。</u></p> <p>⑥そうしてみると、念仏もうすことだけが、最後まで徹底した大いなる慈悲の心で<u>ありましよう</u>、</p> <p>⑦と〔故親鸞聖人は〕教えていただきました。</p>

I これまでの振りかえり

- ・「慈悲」という問題について——慈悲と智慧。慈悲という課題。三縁の慈悲。
- ・聖道の慈悲
- ・浄土の慈悲

II 「かわりめあり」について

⑤「今生にいかに……この慈悲始終なし」

⑥「しかれば念仏まふすのみぞ……大慈悲心にてさふらうべき」

⑤今生に、いかにいとをし不便とおもふとも、存知のごとくたすげがたければ、この慈悲始終なし。	⑤今の〔迷いの〕生にあっては、どんなにいとおいしいと思ひ、 <u>不便だ</u> と思つてみても、 <u>自分の意のままに助けることはできないので、このような慈悲は始めも終わりもないのだ。</u>
⑥しかれば念仏まふすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらうべき	⑥そうしてみると、 <u>念仏もうすことだけが、最後まで徹底した大いなる慈悲の心であります。</u>

・この⑤⑥段落は、第一段に示された主題のうちの「のかわりめあり」という表現を説き明かしているを受けとめたい。とくにこの⑤箇所「め」という慈悲の転換点を見出すことができるかどうか。「今生」の「この慈悲」がどのような慈悲を指すかが、この文を理解する上でキーとなる。

⑤「今生に……この慈悲始終なし」

・「今生に」の「今生」とは「来生」に対比される言葉である。とくに『歎異抄』の第十五章ではそのことが際立つかたちで表現されている。

(十五) 一 煩惱具足の身をもって、すでにさとりをひらくということ。

この条、もつてのほかのことにそうろう。即身成仏は真言秘教の本意、三密行業の証果なり。六根清浄はまた法華一乗の所説、四安楽の行の感徳なり。これみな難行上根のつとめ、観念成就のさとりなり。来生の開覚は他力浄土の宗旨、信心決定の道なるがゆえなり。これまた易行下根のつとめ、不簡善悪の法なり。おおよそ、今生においては、煩惱悪障を断ぜんこと、きわめてありがたきあいだ、真言・法華を行ずる浄侶、なおもつて順次生のさとりをいひのる。いかにいわんや、戒行・恵解ともになしといえども、弥陀の願船に乗じて、生死の苦海をわたり、報土のきしにつきぬるものならば、煩惱の黒雲はやくはれ、法性の覚月すみやかにあらわれて、尽十方の無碍の光明に一味にして、一切の衆生を利益せんときこそ、さとりにてはそうらえ。この身をもってさとりをひらくとそうろうなるひとは、釈尊のごとく、種々の応化の身をも現じ、三十二相・八十随形好をも具足して、説法利益そうろうにや。これをこそ、今生にさとりをひらく本とはもうしそうらえ。

『和讃』（高僧和讃）にいわく、「金剛堅固の信心の さだまるときをまちえてぞ 弥陀の心光摂護して ながく生死をへだてける」とはそうらえば、信心のさだまるときに、ひとたび撰取してすてたまわざれば、六道に輪回すべからず。しかればながく生死をばへだてそうろうぞかし。かくのごとくしるを、さとるとはいまぎらかすべきや。あわれにそうろうをや。「浄土真宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくとならいうぞ」とこそ、故聖人のおおせにはそうらいしか。」

(『歎異抄』第十五章『聖典』(第2版)778-779頁)

「今生」に対する「来生」の第一義は浄土に生まれることである。とくに「浄土真宗には今生に

本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくとならいそうろうぞ」という故聖人（親鸞）のおおせをどのように受けとめるのか。

また「今生」と「現生」とのニュアンスの差についても考えてみたい。

・「いかにいとおし不便とおもへども」

この表現は、「聖道〔門〕の慈悲」において「ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり」と表現されていた心情と区別されるべきなのであろうか、それとも言い換えただけなのだろうか。

『古典基礎語辞典』に「いとほし」は「イトフと同根。イトフは、いやだと思ふものに対して自分の身を引いて避ける意。イトホシは弱い者、劣った者を見ているに忍びず、目をそむけたいと思ふのが原義。気の毒で、見ているのがつらいと思ふことである。……つい同情してしまう気持ちへと変化し、やがて相手がかわいい、心ひかれるという意味になった。」と説明され、また「不便」は「漢字「便」は都合・便宜の意で、それを否定するところから、思いどおりいかず困ったときに使うのが本来の用法。その困った様子は、他者から見て気持ちが痛むことなので、気の毒だと思ふときや愛憐の情を感じる時にも使うようになる。

『歎異抄』では、「経釈をよみ学すといえども、聖教の本意をこころえざる条、もつとも不便のことなり。」（『歎異抄』第十二章『聖典』（第2版）773頁）

親鸞聖人の用例では、「いとほし」は『御消息（拾遺）』に「ひたちの人々ばかりぞ、このものどもをも御あわれみなられ候うべからん。いとおしゅう、人々あわれみおぼしめすべし。」（『聖典』（第2版）頁）とある。「不便」については、『御消息集（広本）』に多く出る（九例）。その用例のいくつかをあげれば、以下の通り。

「煩惱具足の身なれば、こころにもまかせ、身にもすまじきことをもゆるし、口にもいうまじきことをもゆるし、こころにもおもうまじきことをもゆるして、いかにもこころのままにあるべしともうしおうてそうろうらんこそ、かえすがえす不便におぼえそうらえ」（『聖典』（第2版）688頁）

「無明のさけにようたるひとに、いよいよ、よいをすすめ、三毒を、ひさしくこのみくうひとに、いよいよ毒をゆるして、このめともうしおうてそうろうらん。不便のことにそうろう。」（『聖典』（第2版）693頁）

「念仏せんひとびとは、「かのさまたげをなさんひとをば、あわれみをなし、不便におもうて、念仏をもねんごろにもうして、さまたげなさんを、たすけさせたまうべし」とこそ、ふるきひとはもうされそうらいしか。よくよく御たずねあるべきことなり。」（『聖典』（第2版）701頁）

「さては、いなかのひとびと、みなとしごろ念仏せしは、いたずらにてありけりとて、かたがた、ひとびと、ようようにもうすなることこそ、かえすがえす不便のことにてきこえそうらえ。」（『聖典』（第2版）704頁）

などなど。いわゆる造悪無碍の異義や、善鸞の事件において仏道を見失っている人に対する心情をあらわすときに用いられており、「不便」の原義に近いように思われる。

・「存知のごとく」……第二章でも出たが、『歎異抄』における「存知せず」の用例からいうと否定的意味である。

- ・「この慈悲」とは何を指すのか。聖道の慈悲か、浄土の慈悲か、それ以外か。

先人に、「この慈悲」は、聖道の慈悲のことではなく、直前の「今生にいかにいとおし不便とおもへども」とある内容をさすという指摘がある（佐藤正英、安良岡）。ただし安良岡康作はその上で「聖道の慈悲を指す」（安岡 120 頁）とする。

私は、「この慈悲」を「聖道」と限定する必要はなく、「かわりめ」の機縁となる「今生」の慈悲の限界を示すものと受けとめたい。

- ・「始終なし」

「始終なし」とはどのような意味であろうか。近代以降の解釈では、「始終」については、「一貫しない」の意で解されることが多いようである。一般に、「始終」は、「①はじめとおわり。②始めから終わりまで。すべて。「一部一」③最後。結末。将来。……④(副詞的に用いて)①たえず。常に。……②(「始」は添語) 結局。ついには。」(『広辞苑』)である。

三明智彰は、「始終なし」について、『往生要集』巻上の次の言葉を参考にして「始めも終わりもない」意とすべきと指摘している。

「『心地観経』の偈にのたまふがごとし。

世人、子のためにもろもろの罪を造りて、三途に墮在して長く苦を受くれども、男女聖にあらずして神通なければ、輪廻を見ずして報すべきこと難し。

有情、輪廻して六道に生ずること、なほ車輪のごとくして始終なし。

あるいは父母となり男女となり、世々生々にたがひに恩あり」と。

もし人、極楽に生じぬれば、智慧高明にして神通洞達し、世々生々の恩所・知識をば心に随ひて引接す。」(『往生要集』巻上)

「始終なし」は、始めも終わりが無いの意。衆生の生死がつきないならば仏のはたらきもつきることがない。

┌「一貫しない」「結末がない」「すえとおらない」

始終なし└

└「始めもない、終わりもない」

また『西方指南抄』上本に「道綽禪師、念仏の衆生において始終両益ありと釈したまへる。」とある。その場合は、始益としての撰取不捨の利益と終益としての浄土に生まれて阿弥陀仏に見える利益がないことになるが、少しこじつけになろう。

・以上のように見ると、「今生に……たすけがたければ」は、聖道の慈悲から浄土の慈悲への「かわりめ」を指すと解することもできよう。

⑥「しかれば念仏もうすのみぞすえとおりたる大慈悲心にてそうろうべき

- ・「しかれば」は、「爾者」か「然者」か。順接か、逆接か。

・「念仏もうすのみぞ」……「念仏のみぞ」ではなく、「念仏もうすのみぞ」と表現される意味はなにか。

浄土の慈悲において「念仏もうす」という行の意味はなにか。「念仏もうす」ことが「のみぞ」で強調される意味はなにか。それは他の実践を排除することなのか。

ちなみに、「まうす」は、「上に位置して支配力を憂するものに対して、実情を打ち明けて希望を表明する意」（『古典基礎用語辞典』）とされるが、『歎異抄』の文脈では「念仏もうさんとおもいたつところなど称名念仏を意味する。如来の本願力を三業として表現しようとする。

藤秀翠は、この「念仏もうすのみぞ」を第一章の「念仏もうさんとおもいたつところ」、第二章の「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」に関係づけて、

- (1) 如来の大心にいよいよ深く帰入するところであり、
- (2) 如来の大心を背負うて現実界に出でんとするところである

と「ところ」として理解している（藤『講讃』）。

- ・「すえとおりにたる」……最後まで徹底している。

参考→「彼の国に到り已りて六神通を得、生死に廻入して衆生を教化し、後際を徹窮して心に厭足なく、乃ち成仏に至るを亦廻向門と名づく」にあり、」（『往生礼讃』）

「すえ」は、「末」であり、「末徹る」もしくは「末通る」は、「終わりまでやりとげる。最後までつらぬき通す」の意、辞典では当時の用例として『梁塵秘抄口伝集』（12c後）一〇に「如何にまれ、すゑとをらむずることよ」を挙げている（『精選版 日本語大辞典』）。

「すえとおりにたらず」という問題はなにか。

- ・「大慈悲心にてさふらうべき」

「にて」は断定の意をあらわす。

「さふらうべき」

安良岡は、この「べき」は推量の助動詞であり、やや婉曲に言っているのは「将来における往生や成仏や還相としての衆生済度に関わっているから」（安良岡 123）という。もう少し強い意味でとれないだろうか。

「大慈悲心」

真実信心即ち是れ金剛心なり。金剛心即ち是れ願作仏心なり。願作仏心即ち是れ度衆生心なり。度衆生心即ち是れ衆生を攝取して安楽浄土に生ぜしむる心なり。是の心即ち是れ大菩提心なり。是の心即ち是れ大慈悲心なり。是の心即ち是れ無量光明慧に由りて生ずるが故に。願海平等なるが故に発心等し。発心等しきが故に道等し。道等しきが故に大慈悲等し。大慈悲は是れ仏道の正因なるが故に。

（『教行信証』信巻、『聖典』（第2版）274頁）

- ・「大慈大悲心」と「大慈悲心」。

・⑥をどのように受けとめればよいのか。「念仏もうす」のは誰か。「念仏もうすのみそ」とはどのような意味か。もし「念仏もうす」と「大慈悲心」とはどのような関係にあるのか。

(ア) 「そうであれば〔私たちが〕念仏もうすことだけが、〔私たちの〕最後まで徹底する広大な慈悲の心〔の実践〕であるはずである」

と訳すか、もしくは

(イ) 「そうであれば〔私たちにとっては〕念仏もうすことだけが、最後まで徹底する〔如

来の〕 広大の慈悲の心〔にかなうこと〕であるはずである」
と訳すか。(イ)はどこまでも慈悲の主体を如来として解釈してみた。

【参考】

(21) 如来の回向に帰入して 願作仏心うるひとは

自力の回向をすてはてて 利益有情はきわもなし

(『正像末和讃』 『聖典』 (第2版) 612頁)

・ここにいう「如来の回向」は「往相回向の大慈・還相回向の大悲」である。「如来の回向に帰入して」「自力の回向をすてはて」ることによって「利益有情はきわもない」という「きわもない」が「すえとおりたる」という意味であろうか。

⑦「と云々」について

⑦と云々。	⑦と〔故親鸞聖人は〕教えてくださいました。
-------	-----------------------

おわりに

- ・『歎異抄』における世福の問題
- ・『歎異抄』第四章の思想と現代

=====

【参考】

・曾我量深の「無縁の大悲」理解について——機の深信の「無有出離之縁」と無縁の大悲『本願の仏地』(1933年) (「宗教的信が内に展開する願の世界」1927年11月広島市三日間六講の記録。『仏座』に2回にわたり連載。)

しからば無縁の大悲といふことは何かといふと、私は無有出離之縁の大悲だと思ひます。出離の縁のない大悲であります。……無縁の大悲といふことは、助かる縁手懸りのつきはてた、さういふものを憐れむのが無縁の慈悲だ、……永遠に浮かぶ瀬のない者を憐れむのを無縁の大悲といふのであります。……私は悲といふ字はやはりかなしみである、あはれむとはかなしむことなり。……法蔵菩薩が一切衆生の罪を自分の双肩に荷うて立つて行かれる心持といふものは、もう永遠に浮かぶ瀬がないところの深き悲しみであります。

(『曾我量深選集』五・320-321頁)

念仏申すのみぞ業縁に徹底し、念仏申すのみぞ涙が内面化されて、自分の苦悩を通して群生の業障に徹するものなるが故に、その念仏申すのみぞ、すえとほりたる大慈悲心である、といふことになるのでありませう。即ち凡夫の悲しみに於て念仏せしめられる、それを機縁として仏が働いて下さるところのものがあるのですから、念仏申すのみぞすえとをりたる大慈悲心であると、かうお説き下されたのでありませうか。

(『歎異抄聞思録』(上) 『金子大榮選集』COMA LIBRI、1980年、234頁)